

瀬戸内の風に包まれて

～エルトゥールル号の話から～

ここは瀬戸内(今治)の小さな漁業の町。目の前には緑の島々が見え、周りの海は、潮まわの流れが速く渦巻き「海の難所」と呼ばれている。この町に、活発な小学6年生の洋子しおが住んでいた。父は漁師で母は看護師をしている。洋子は、学校の帰りには近くに住んでいる祖父母の家によく寄っていた。おばあさんはおいしい手作りのおやつを出してくれるし、元外国航路の船員だったおじいさんは面白い外国の話をしてくれるからだ。



来島海峡を渡る貨物船

今日も学校の帰りに祖父母の家に寄ると、二人が笑顔で迎えてくれた。そして、いつものようにおばあさん手作りのクッキーを食べながら、一緒におじいさんの話を聞いた。

「洋子、今日は以前同じ船に乗った和歌山県串本町出身の仲間から聞いた『エルえがおトゥールル号遭難事件とその恩返し』の話をしようわい」
むか
いっしょ
くしもとちよう
そうなん おんがえ

明治23年(1890年)9月16日、この日は大型の台風が和歌山県大島村(現おおしまむら在の串本町)に近づいており、檜野埼くしもとちよう灯台の当直の職員は緊張した顔つきで働いていた。午後10時半ごろ、灯台かしのざき舎の戸が突然「ドンドン」とたたかれた。驚いた職員が入り口の戸を開ける



トルコの軍艦 エルトゥールル号

と、全身びしょぬれで、血まみれになった外国人が倒れこんできた。

職員は言葉が通じなかったが、すぐに応急処置を行った。何とか万国信号ブックを使



遭難して救助を求めるトルコの人々(絵画)



遭難者を救護する大島村の人々(漫画)

い、彼はオスマン帝国(現在のトルコ共和国)海軍の兵隊であることが分かった。そうこうしているうちに、助けを求める人たちが次々とやって来た。身振り手振りで、まだ多くの人が崖の下で救助を待っていることも分かった。

灯台の職員は嵐の中を近くの大島村に助けを求め、村をあげての救出活動が始まった。村人たちは、目もくらむような急な崖を下りて生存者を捜した。

「大変だ、かなり体が弱っているぞ！」

村人たちは、手当てをするなり負傷者を抱えて崖をよじ登った。そして、崖の上で浴衣に着替えさせ、ふとんに寝かせた。しかし、冷えた体の震えはなかなか止まらなかったの
で、一晩中、体じゅうをこすって温め続けた。

「ありったけの食料と着物を持って来て！」

当時の村は決して裕福ではなかったが、衣服やふとんを差し出し、少ししかない卵やサツマイモ、非常用に蓄えていた米や正月用にとっておいた鶏まで提供した。村人の懸命な手当てのかいもあって生存者69名は体力を回復した。

それから、69名は神戸の検疫所に搬送され、日赤の医師や看護師の献身的な治療や看護を受けた後に、一人も命を落とすことなく、日本の軍艦でオスマン帝国に送り届けられることとなった。

しかし、まだ多くの乗組員が異国の海に取り残されたままであった。

村人たちは救助活動後も必死で



救助されたエルトゥールル号乗組員

そうさく いたい しゅうよう
捜索を続けて約600名もの遺体を収容した。

その後、檜野埼灯台のそばには慰霊碑いれいひやトルコ記念館くしもとちようが建てられ、串本町(旧大島村)と在日本トルコ大使館共催きようさい いれいさいによる慰霊祭が5年ごとに行われている。また、毎年11月には地元の方々も参加して、大島小学校や大島中学校の児童生徒による慰霊碑の清掃活動も行われている。

とだ
今も日本とトルコの友好は途絶えることなく続いている。



トルコ記念館



日赤平時国際救護発祥の地碑



遭難慰霊碑



慰霊碑を布でみがく大島小学校の児童

1985年(昭和60年)3月、エルトゥールル号の事故から95年後にイランとイラクの間で戦争が起こり、イラクは「ぐんようき軍用機だけでなくみんかんき民間機も撃ち落とす」と宣言した。そこで、日本政府はイラン在住の日本人を救出きゆうしゅつするためにさまざまな対策たいさくを考えた。だが、当時はイランに乗り入れする日本の航空会社はなく、自衛隊の海外活動を認める法律もなかった。そのため、他国きゆうえんに救援を依頼いらいするしかなかった。いろいろな国に打診だしんしたが、自分の国の救出せいいつぱいで精一杯でことごとく断られてしまった。すっかり望みがなくなったとき、唯一救援ゆいいつに

な の
名乗りを上げた国があった。あのオスマン帝国、現在のトルコ共和国だ。

トルコと日本国民がともに心配しながら見
守る中、何とか2機のトルコ航空機が215名
の日本人を乗せてイランからトルコ領空に入
ることができた。撃墜開始のタイム・リミットか
らわずか1時間15分前のことだった。



日本人を乗せたトルコ航空機

「助かった」と涙を流す日本人がトルコ航
空機の乗員に尋ねた。

「なぜ、私たちを助けに来てくれたのですか」

「エルトゥールル号の恩返しです」

夕食時に祖父から聞いた話をすると、父は言った。

「その話、前にじいさんから聞いたことがあらい。わしじゃて遭難者がおったら、どこの
国の人じゃろが助けるぞ。それが海で生きる者同士っちゅうもんよ」

新型コロナウイルス感染症で病院が大変な中、いつも患者さんに温かく接している看
護師の母も、

「洋子、おじいさんのエル何とか号と恩返しの話じゃけど、ほんとにええ話じゃね」

とほほ笑みかけた。母の笑顔で洋子に熱いものが込み上げ
てきた。

「お母さん、おかわり！」

2021年(令和3年)5月27日深夜、洋子の家の前の海で日
本の貨物船と外国のケミカル船が衝突し、乗組員が急流の
海へ投げ出されるとい海難事故が起きた。午前1時ごろ、
洋子の父に海上保安部から突然の救助要請が入った。真
っ暗な海の中、巡視船や地元の漁船など10数隻で救助活
動が行われ、洋子の父も「早く助きたい一心」で仲間と力を
合わせて捜索に当たっていた。



愛媛新聞(R3.5.29 付)

この日、洋子は母親が病院の夜勤^{やきん}に出っていたので、父と二人で床^{とこ}についていた。よく朝、ふと目を覚ますと、父と母の姿はなくてそばには大好きな祖父母がいた。

「沖で船同士^{しょうとつ}が衝突して、父ちゃんは今助けに行つとるけん心配すなよ」
祖父の声に少しは安心したが、朝日^{のぼ}が昇っても父と母が帰って来ないので心配でしょうがなかった。

不安なまま祖父母と朝食^すを済ませ、学校へ行こうとしていた時だった。父の「帰ったぞ」、母の「心配かけたね」に、洋子は涙が出そうになった。

その日の夕食時は祖父母や近所に住む親せきの人^{おおぜい}も来ており、大勢そろってのごちそうに洋子は喜んでいた。途中^{とちゅう}、救助の話になり、祖父が、
「徹夜^{てつや}の人助け^{ひとだす}は大変じゃったろが。二人ともようやったのう」
と言うと、父が母を見ながらポツンとつぶやいた。

「当たり前のことをしてただけよ。日本人も外国人もないわい。のう母ちゃん」

その言葉に一同うんうんとうなずいた。その時洋子の頭に、エルトゥールル号の乗組員を助けた大島村の人たちと目の前の両親が重なった。

「お父さんやお母さんのしたこと、大島村の人たちがトルコの人たちにしたことと同じや！」

今日も洋子は瀬戸内の優しい風に包まれて、集団登校班の下級生の世話をしながら登校して行った。



瀬戸内の島々

引用や参考にさせていただいた本や資料（出典、資料提供）

- 海と空—檣野の人々—（中学校「私たちの道徳」 文部科学省）
- つなぐ思い—エルトゥールル号—（和歌山県海南市立第三中学校 道徳資料）
- 全国青少年赤十字賛助奉仕団会報『救出』から学ぶ（和歌山県青少年赤十字賛助奉仕団）
- エルトゥールル号遭難事件（ウィキペディア）
- エルトゥールル号遭難の絵画（串本町 トルコ記念館）
- 大島村の人々による救助活動の漫画（串本町役場 産業課）
- エルトゥールル号友好の始まり（小学校道徳 光村図書出版）
- 大島小学校の慰霊碑清掃の写真（串本町立大島小学校）
- 時空を超えた絆—日本とトルコの友好—（串本町教育委員会）
- 赤十字名所紀行「平時国際救護発祥の地碑」（赤十字ニュース No. 976 2021. 9月号）
- 「助けたい」 搜索懸命 地元漁船夜を徹し（愛媛新聞 2021. 5. 29）